

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 18 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22653119

研究課題名（和文） 世界に通用する日本型品性・品格教育の開発支援

研究課題名（英文） Encouragement of school wide character education in Japan ; aiming at a world-level throughout supporting professionals development by researchers.

研究代表者 青木多寿子 (AOKI TAZUKO)

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：10212367

研究成果の概要（和文）：義務教育の9年一貫でよい習慣づくりを、学区を挙げて日本で最初の取り組んでいるA教育委員会の取り組みを、専門家チームで支援し、世界に通用する人づくりを目指した。品格教育への疑問は、専門家チームにより端的な文書で回答した。また、米国の専門家をお招きしてご助言も頂いた。これらの結果、この取り組みは、世界基準でも優れた点を持つ取り組みであることがわかり、品格教育への基本的な疑問はかなり解消された。

研究成果の概要（英文）：A school district began school wide character education. This is the first case in Japan. The purpose of this study is to support them to develop a world-level education. Our professional teams helped to answer theoretical questions from teachers. Also we invited a professional researcher and an excellent director from USA to give them some advices. Teachers understood the meaning of character education more clearly and found some ideas to develop them more excellent.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	0	1,100,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	420,000	2,920,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：生活指導・生徒指導

1. 研究開始当初の背景

Character（品性）とは、生まれつきの性格ではなく、生後のよい習慣の形成で培われる人格の部分の意味する。つまり、品性・品格教育（以下、品格教育）とは、全米で行われ始め、規範を立て直した教育の一つで（加藤，2007），子ども達がよい習慣（毎日学習する，

敬語を使う，他者に親切にするなど）を形成できるように，学校全体，または，学区全体で徳目を定め，学校中で取り上げてよい習慣づくりを目指す。その際，家庭や地域と連携し繰り返し，繰り返し伝え，子ども達により習慣を身につけさせ，これらの徳目が自分の人生の行動指針となる習慣化を目指す教育である。

この教育で取り上げられる徳は、「敬意(respect)」「責任感(responsibility)」「誠実(honesty)」「自己統制(self-discipline)」「根気(perseverance)」「寛容(compassion)」など、民族や宗教を超えて人類に共通なものが扱われる。それは、日本人が見ても、「これは日本の徳ではないか」と思うようなキーワードで構成されている。言い換えるなら、日本人が見ても、アメリカ人が見てもおかしくないキーワードとなる徳目を定め、それに関してよい習慣を育ててゆけば、世界に通用する人材を育成することが期待できる。

本研究は、平成20年より全区実施に取り組み始めたA教育委員会の教育長より依頼を受けて行った研究である。A教育委員会は、品格教育の理論を応用して、9年一貫教育に取り組み、次の様な取り組みを行ってきた。

9つのテーマを選定する際、A教育委員会では、保護者へのアンケート調査を実施し、保護者が子ども達に身につけて欲しいと思っている徳に関わるキーワードを調査した。さらに、そのアンケート結果をベースに住民と専門家で形成する委員会を立ち上げ、内容を吟味し、9種類のテーマを定めた。

また、この9つのテーマについて、月に一つのテーマを取り上げ、1年間で一サイクルするカレンダー方式でよい習慣づくりに取り組む方針を決めた。その折り、それぞれの学校の問題にあわせて、各校が独自の月のテーマを設定できる月も用意して、各校のオリジナリティが出せる工夫もした。また、テーマに関するポスターを中学生用と小学生用について作成し、毎月、各学校に配付して、掲示してもらった。

さらに指導書を作成した。そこでは、教師が毎月のテーマに合わせて説教をしたり、テーマを押しつけたりしないように、つまり児童生徒が9つのテーマを核として、自ら主体的によい行為の習慣を身につけてゆく工夫ができるようにすることが明記されていた。

これに伴い、各学校は次の様な取り組みを行った。例えば、ある学校では、毎月のテーマについて、月の最初の全校朝礼で話題にする取り組みをする、つまり“責任”の月なら“責任”に関わる校長や他の教員による講話を行う。中学校の中には、生徒会活動を通して、生徒会主催の生徒による講話も合わせて行ったり、生徒会の目標を決めたりする学校もあった。ある学校では、毎月のテーマ関わる内容を道徳で取り上げている。また、ある学校では、毎月のテーマに関わる自分の今までの行動を振り返り、自分で考えて目標を立て、責任に関わる行動を実行する計画を立て、この計画について保護者から励ましのコメントをもらう活動等である。

品格教育では学校教育場面だけでなく、保護者やコミュニティを巻き込み、家庭でも声をかけてもらうことが大切にされている。

例えば、学校便りや校長室便り、ホームページなどを通して、今月のテーマと一緒に子どもたちの様子や学校の実践などを保護者や地域の方々に広くお知らせする、PTA主催の研修会で品格教育を取り上げる、PTAの集まりの中で、家庭でできることについて話し合ってもらう等の活動を行った。加えて、月ごとのポスターは地域内の公共施設や掲示板だけでなく、約40の商店街に毎月掲示して頂いた。

2. 研究の目的

これらの活動を通す中で、品格教育についていくつかの疑問も出されるようになった。具体的には「道徳教育との関係」「宗教との関連」などである。その他、運用に関してよいアイデアを求める問いが投げかけられるようになった。それは、生徒会活動との関係、保護者との連携の仕方、などであった。

本研究の一つの目的は、これらの疑問や問い合わせについて、教育心理学、道徳教育、倫理学、特別支援、視覚伝達デザインの視点から資料を提供し、支援することである。

加えて品格教育の徳目の持つ国際性を生かし、かつ、日本独自のよさを生かして、この取り組みをさらに発展させるために、アメリカの専門家をお招きしてアドバイスを頂く。こうして品格教育を通した義務教育9年一貫の人づくりを世界に通用する視点で理論面、実践面でご助言頂くことで開発支援を行うのがもう一つの目的である。

3. 研究の方法

A教育委員会と連携を取り、指導主事を介して取り組んでいる学校に対する疑問等に答える形で支援を行った。加えて、PTAや学校の依頼にお応えして講師も引き受けた。加えて、米国の専門家による日本の取り組みを見て頂き、視察を通して日本の取り組みの強みと補強点についてご助言頂くことにした。

4. 研究成果

4-1 品格教育に対する質問について

品格教育には、道徳教育との違い、生徒指導との関係等と区別が難しい部分がある。これらについて正確に的確に回答するためには、的確な文書を作成する方が良いと考えた。

そこで、「もう一つの教育—よい行為の習慣をつくる品格教育の提案」青木多寿子(編)を、我々の研究グループで執筆した。その際、学術論文のようなものではなく、読んでもら

えば理解できるように、コラムやQ&Aの形式で回答した。具体的には「品格教育と道徳教育」「品格教育と倫理学」「品格教育と宗教」「品格教育と生徒指導・キャリア教育」「品格教育と徳目主義」「教材としてのポスター」「視覚教材の作り方アドバイス」「教え込みとの違い」等である。これにより、品格教育そのものについての疑問については、解消されやすくなったと考える。

4-2 米国の専門家による視察について

予定していた平成23年の来日が先方の都合により不可能になったので、研究費を繰り越し、平成24年に2名の専門家をお招きした。一度にお二人を招聘できたので、お一人を理論家（ボストン大学品格教育センター、元センター長）の、Lerner先生、全米で品格教育優秀校として表彰された学校の品格教育担当のディレクター Newman先生である。

招聘の際、来日に際して、前もって、教育委員会から打診のあった「家庭や地域との連携の工夫」等についてお尋ねした。

以下、視察報告書（共著）を記す。なお、以下の文は、考察で活用するために、パラグラフ毎に、著者が記号を振った。

4-3 米国専門家の視察報告

a1)A教育委員会では、品性を大切にすることを明示し、教育長や教育委員会、学校長のリーダーシップに加え、パンフレットやポスター等の印刷物を活用して、小中学生の品格教育に取り組んでいました。これらは効果的な品格教育を行うには必須の前提条件であり、学区の取り組みは素晴らしく、賞賛に値するものでした。

a2)品格教育の重要性を明らかにするため学区が取り組んできた経緯、つまり教員、管理職、児童・生徒、そして親との協力的な取り組みを形成したプロセスは賞賛に値します。9つの月テーマは、わかりやすい言葉で表現され、校内に掲示されていました。これは、親を含む地域や区民にも広く配布され、品格教育の効果を高めるわかりやすい言葉を地域に提供しています。

a3)今回訪問した学校では、人格や人格に関わる発達（保健、いじめ対策への取り組み、他）をととも重視し、適切な年齢、そして発達に応じて、品格の大切さに気付く取り組みをしている証拠をたくさん見つけました。

2つの学校への提案

a4)管理職や指導グループが品格教育への理解を深めて、各学校の教育目標の中にわかりやすく、確かな形で取り入れられるよう、継続して指導者研修の機会を提供し、サポートをすることをお勧めします。学校のリーダーは、日常生活の中で、児童・生徒達の教

室内だけでなく、品格教育で使用する言葉や活動を、学校全体でどのように広く取り入れていくか、と言う明確な視点を持ち、児童・生徒に関わることが不可欠です。

a5)教師が、品格のメッセージを様々な場面で、多様な手法を用いて取り入れる支援を行うとさらに効果的だと思われるものは、校訓、校則、目標、いじめ対策、学習目標、文部科学省の道徳教育目標カリキュラムです。また、9つの月テーマをもとに決定した目標、各学級での目標等も有効です。これらに関して、学区が品格教育の9テーマの言葉を含めて、児童・生徒や保護者へのメッセージを構成できるように検討すると効果的でしょう。

a6)品格教育の9つの月テーマを単なる月ごとの目標リストとしてではなく、「品格の規範」と考えるとよいでしょう。児童・生徒は常に品格に関する「全テーマ」と向き合っている必要がありますが、一方で、1,2のテーマに焦点を絞る方法もあります。低学年では、全テーマでなくとも、2,3でもよいのではないのでしょうか。最終的に、児童・生徒が全テーマ/規範を基盤として、それらを意図的に関連づけ、自らの行動を選択できるようになることが肝要なのですから、テーマを絞ることもひとつの方法です。

B 中学校の取り組みへの感想 b1)B中学校は活気があり、心温まる共同体が築かれ、学校は生徒にとって居心地のよい場所であるように見受けました。互いの話をよく聴き、熱心に取り組む、尊重し、助け合っている様子が見え、うかがえました。

b2)生徒は、私たちの訪問に暖かい挨拶を投げかけてくれました。生徒が地域活動への参加を奨励していると聞きましたが、このような「外の世界」と有意義な交流は、よい心とよい精神の習慣（good habits of heart and mind）を実践する素晴らしい機会です。

b3)道徳の授業、目標を示すポスター、掲示物、スローガン等を活用して、品格の向上や、よい行為を行うことの大切さを気づかせ、啓蒙する活動がうまく進められていました。

b4)いじめのような、たいへん難しい課題にも直接的に取り組む、生徒を品格向上の機会に参加させて前向きに取り組んでいました。校長先生は、生徒や親に直接メッセージを届ける試みを行っていました。これは問題について、生徒や保護者と協力して取り組む優れた方法だと思います。個々人のよい面を集中的に取り上げ続けることは、いじめが起ころうなとき、それを防止する重要な試みになると思われます。

B 中学校への提案 b5)効果的な品格教育を実践しようとするには、授業内容、教室、廊下や食堂、学校活動などでの態度など、学校

生活のあらゆる場面において、品格教育を組み入れるようにするともっとよくなるでしょう。大人たちは、言葉を読むときに意図的にテーマに関わる言葉を使い、生徒達の手本となって、生徒が道徳的に振る舞い、品格の向上をめざすように促すことが必要です。その際には、月テーマだけに特化するのではなく、全のテーマを大切なものと考え、行動することが必要でしょう。

b6) B 中学校に入学する生徒は、小学校時代から品格教育の9テーマに親しんできていますが、品格に関わる実践の機会が毎日あることを意識しているわけではありません。また、校外でも、必ずしも品格ある行動をとることを実践しているわけではないでしょう。ですから、教員、事務職員、他、全職員で、生徒に、よい品格とは何であるか、よい品格とは「どのように見える行為」なのか、良い品格ではないものは何かを理解させる必要があります。このため、よい品格の事例や手本として教科書、映像、歴史等の教材を活用するとより効果的でしょう。生徒自身が疑問をもち、他の選択肢について考える等、自分自身の行動指針を決定できるよう、教師は繰り返し、繰り返し働きかけることが大切です。小学校に接続して中学校で発展させることを考えると、小学校の学びを大切にしたいこのようなやり方を取り入れることがさらに効果的だと思われます。

b7) 学校での品格教育の取り組み方を工夫すれば、生徒は一層スムーズに考えを行動へと移せるようになることでしょう。そして実践することによって意識が高まり、無意識のうちに肯定的な生き方や振る舞いができるようになります。このためには、道德教育のカリキュラムで学ぶ課題や取り組み、そして、品格教育のテーマの言葉などを使い、生徒に、自分自身の選択肢を考え、実践し、自らの進歩を振り返るような機会を提供することが必要です。生徒を引き込み、成長の速度を上げるには、「短所」だけを取り上げるのではなく、長所を基礎として品格を伸ばせるように働きかけると、より効果的でしょう。

b8) 訪問している間に、道德教育のカリキュラムと学活の活動計画は、教員が協力して作成しているとお聞きしました。しかし、生徒の品格向上の方法を開発するため、それを教員自身の専門的能力と結びつけることに関して、教員間の協力については特に言及されませんでした。教員の専門能力向上に目を向ければ、品格教育の重要性が明確になり、教師は日々、教えることへの満足度を高めた上で、生徒の行動とその行為の振り返りを融合する方法を学ぶ助けになります。教員は、自分が担当する科目に関わる道徳的要素、品格の要素について、生徒に問いかける発問ができるのではないのでしょうか？生徒が常に

品格向上について自分自身に問いかけ、内省できる問いかけを、教師ができるように心がけてください。

C 小学校の取り組みへの感想 c1) C 小学校では、ガラス張りの給食調理室、休憩時間終了を知らせるディズニーの「ハイホー」のメロディ等、環境がすでによく整えられ、児童に様々な品格向上の機会を提供していました。

c2) 地域の人たちへは、廊下の掲示板を利用し、品格に関する明確なメッセージを発信しています。学区のポスターに合わせた児童の作品の展示が、重点ポイントを示していました。学校が児童ひとりひとりの健康、安全、幸福そして「成長」を大切に考えていることが伝わってきました。

c3) 児童自身が目標設定を行い、成長の度合いを内省する仕組みをつくり、重視している点はこの学校の際立った偉業と言えるでしょう。熱心な校長先生は、親のコメントが書かれた全校生徒のレポートを全部お読みになり、児童ひとりひとりの品格向上に努めておられます。

C 小学校への提言 c4) 既に品格教育の環境が整っているので、児童が行動をしているその時、月テーマの言葉を示すことから始めたら、一層の品格向上強化につながります。以下に例をあげます。

c5) この学校は、給食の調理過程を見ることが出来ます。ここで、児童達によく見るように声をかけるのも一つの方法です。美味しく身体にいい食べ物を、給食の時間に間に合うよう「責任」をもって準備している栄養士や調理師の「やりぬく心」に気づかせましょう。給食室の職員に対し、普段から「感謝」の気持ちを示させるようにしましょう。

c6) 児童は学校を掃除します。校舎の清掃は、学習する環境を「大切に」し「尊重する」ことです。そして、校舎を清掃する「責任」を互いに果たすことでもあります。

c7) 風邪をひいたらマスクをつけ、きちんと手洗いをし、天候に合った服装をするなど、自らの健康に配慮するよう奨励することも品格教育です。自分の身体を「尊重(大切に)」し、行動に「責任」をもつよう教える機会になります。水飲み場の蛇口から水が滴らないようきちんとしめることなども「責任」であり、「節度」ある品格ある行為であることも品格教育として伝えることができます。

c8) 品格に関する教師の専門能力を高める研修を強化すると、品格が学校の中で中核となり、品格の重要性がより明確になり、教室で日常的にどんな声かけや取り組みが必要であるか、そして、児童自身の振り返りを、どのように教室の取り組みに融合させるかを一層理解できるようになります。

c9)担任が、学級の児童と一緒に9つのテーマに沿った教室ルールをどのように策定するか、各自がどう責任を果たし、教員間で互いにどう支え合えるのかを理解するため、研修の機会を検討しましょう。どうやって道徳的要素に関する重要な問いかけをするか、また、教科を教える中で、児童が常に品格の向上について考え、自分自身について、確かな振り返りをする活動を続けるには、教員の学びを支援することを考えると効果的でしょう。まずは教員が、鍵となるこの種の問いかけに馴染んだなら、教員が親にもやり方を指導することもできるようになります。

c10)特別な支援が必要な子どもを含め、児童すべての長所を伸ばし、成長させる取り組みを続けることをお勧めします。品格教育は、特別支援学級と普通学級の児童たちを融合するよい助けにもなります。

c11)振り返りカードによる目標設定は、児童達全員が参加できますし、彼ら自身が9の月テーマを基に、どのような目標を設定する必要があるかを具体的関わる恰好の機会となっています。

品格教育への親の参加を促すアイデア（視察前に受けた質問に関して）

d1)訪日前に受けた質問について、私たちが提案できるアイデアをご提供致します。
学校で: d2)児童・生徒の保護者に品格テーマやこれに関わる学校の方針（校則、倫理規定、スポーツ行事の観戦倫理等）について理解を促し、同意書に署名してもらいましょう。

d3)9テーマが学校カリキュラムにどのように組み込まれているかを周知しましょう。

d4)宿題が9テーマと生徒の品格向上に関連することを示し、宿題をすることに同意してもらいましょう。

d5)児童・生徒の学業面、行動面での成長について親と話す際、9テーマの言葉を使用するように心がけましょう。

d6)高学年生に、親との会合の開き、児童・生徒が自主的に学び、品格向上に取り組む様子を見てもらうことを検討しましょう。

家庭で: d7)教員は、研修会での活動や研修で得た知識を親とも共有するようにしましょう。親は子どもたちと会話のきっかけになる質問のし方を学ぶことができます。回答を与えるのではなく、むしろ質問をすることによって、子どもたちの潜在的なやる気を高めることにもつながることでしょう。

d8)学校での学習内容を補完し、親子で一緒に読める図書のリストを提案しましょう。

4-4 視察報告に関する考察

米国の専門家に来て頂き、ご意見を頂くことで、次の様なことがわかった。

まず、a)全体を見てわかることは、この学区の取り組みを「賞賛に値する」と高く評価し(a1)、9つの月テーマについても、その設定のプロセスを「賞賛に値する」と評価し(a2)、「効果を高めるわかりやすい言葉を地域に提供している」と述べていることである(a2)。加えて、いじめ対策についても、高い評価をしている様子が窺える(a3)。さらに、C小学校の振り返りカードを校長がチェックする取り組みは、全員が9つのテーマをベースに、目標を設定するよい機会であり、偉業であると高く評価している(c3, c11)。また、教室環境についても評価が高いことがわかる(b3, c1, c2)。

また、日本独自の取り組みとして評価しているのは、給食と給食係の当番、掃除である(c5~c7)。給食という活動、給食当番という役目を果たすことを通して、感謝や責任感を、また掃除を通して、責任感や公共心を培うよいきっかけになることを指摘している。日本の学校が当たり前のように行っているこれらの取り組みは、品格教育のよいチャンスになることを知ることができた。また、保護者や地域との連携についてもご助言頂き(d1~d7)、加えて、小学校低学年では、9つのテーマの中から、強化するものを選んでよいかもしれない、というアドバイスを頂くことができた。

他方で、今の取り組みをさらに発展させる示唆も頂いている。それは、主に次の点に集約されると考えられる。

- ① 校則、校訓、目標、いじめ対策、学習指導要領、クラスの目標等と9つのテーマの言葉を含めて関連させる(a5, d3, d4)。
- ② あらゆる場面で教師が品格の言葉を生徒や保護者に向かってに向かって積極的に使う(a4, b5, b8, c4, c5, c8, d5)。
- ③ 児童生徒に、よい品格について考える機会をつくるため、事例や手本として教科書、映像、歴史等の教材を活用する工夫をする(b6)。
- ④ 児童生徒が、疑問を持ち、自分自身の行動指針の選択肢について考え、自分自身の行動指針を決定できるように、教師は繰り返し、繰り返し働きかけ続ける(b6, b7)。
- ⑤ 成長の速度を速めるためには、「短所」だけでなく、「品格」を基礎として、品格を伸ばせるように働きかける(c11)。
- ⑥ これらを実行するために、教員研修を続けること、である(a4, b6, c8, c9, d7)。

5 まとめ

本研究の目的は、学区全体で義務教育の9年一環で、よい習慣づくりに取り組む教育委員会からの依頼で、その取り組みを発展させるため、専門家チームで支援を行い、世界に

通用する人づくりになるように、その学区の品格教育を支援することであった。

品格教育そのものの疑問に対しては、各領域の専門家による回答をつくったことで、研究者の側も多方面からの質問に、自信を持って回答できるようになったと考えている。

品格教育先進国、米国の専門家をお招きしての視察により、A 教育委員会の取り組み、いくつかの学校の独自の取り組みは、米国の専門家からみてもかなり有効な実践であることが確信できた。加えて、給食当番という、日本にはどこにでもある係りが、責任や節度を教えるよい機会であることにも気づくことができた。そして、さらに発展させるには、教師が児童生徒と話をする際、穂と者と話をする際、積極的に9つのテーマを用いることができるような、また、児童生徒が、9つのテーマを用いて、自らを高める機会を増やしてゆけるような教員研修会の機会を設けることが重要であることがわかった。

6. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 54 件)

- ① 青木多寿子・高橋智子・柴英里 学校全体で取り組む品格教育の効果について 広島大学大学院教育学研究科紀要, 61, 1-8, 2012. (査読無し)
- ② 新 茂之 C.S. パースの「連続主義」における「連続体」の論理的構造 日本デュイ学会紀要, 53, 23-32, 2012. (査読有り)
- ③ 川合紀宗 アメリカ合衆国の学校教育現場における言語療法士の役割と課題 コミュニケーション障害学, 28, 128-136, 2011. (査読有り)
- ④ 橋ヶ谷佳正 岡山市重要建造物のマーク 日本タイポグラフィ年鑑 (印刷中; 2013) (審査有り)

[学会発表] (計 57 件)

- ① Kawai, N. How do International School Students with Disabilities Receive Their Services in Japan? A survey Study. International Conference on Inclusive Education. 2013 年 2 月, つくば市.
- ② 宮崎宏志・新茂之 「価値の相対比に関する一考察」日本道徳性発達実践学会 2010 年 11 月 同志社大学
- ③ Aoki, T., & Yamada, T. Character Strengths and Well-being in Japanese Children and Adolescents (3), The 118th Annual Convention of American Psychological Association, San Diego, USA, 2010 年 8 月 15 日.

- ④ Aoki, T., Yamada, T., & Hashigay, Y. Character Strengths and Well-being in Japanese Children and Adolescents (3), The 12th European Congress of Psychology, Istanbul, TURKEY, 2011 年 7 月 7 日.

[図書] (計 10 件)

- ① 青木多寿子(編) 青木多寿子, 橋ヶ谷佳正, 宮崎宏志, 新茂之, 山田剛史(著) ナカニシヤ出版 「もう一つの教育; よい行為の習慣をつくる品格教育の提案」 2011 (総ページ数; 73 頁)
- ② 山田剛史・井上俊也(編著) メタ分析—心理・教育研究の系統的レビューのために—, 東京大学出版会 2012. (総ページ数; 296 頁)

[その他]

ホームページ等

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/aoki/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青木 多寿子 (AOKI TAZUKO)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 10212367

(2) 研究分担者

橋ヶ谷 佳正 (HASHIGAYA YOSHIMASA)
岡山大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 50252945
宮崎 宏志 (MIYAZAKI HIROSHI)
岡山大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号: 30294391
山田剛史 (YAMADA TSUYOSHI)
岡山大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号: 10334252
新 茂之 (ATARASHI SHIGEYUKI)
同志社大学・文学部・教授
研究者番号: 80343648
川合 紀宗 (KAWAI NORIMUNE)
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号: 20467757

(3) 連携研究者: なし